

「話したら楽になれるよ」

使徒言行録 18 章 9～10 節

聖学院大学 心理福祉学部兼人間福祉学部チャプレン 五十嵐 成見

この夏休み(2018 年)、私は特別な経験をしました。大学のボランティアセンター主催で、東京都東村山市にあるハンセン病の療養施設多磨全生園の見学ツアーに行ったのです。多磨全生園は前から気にはなっていました。ただ、行く機会がなかなかありませんでした。今年、ボランティアセンターから多磨全生園の見学会の開催の案内チラシをいただき、しかも、元ハンセン病患者の方のお話を聞くことができるともありました。これは、もう行くしかないと決めたのです。

当日は、男子聖学院の中学生とその保護者も参加し、学生、教職員合わせて20名ほどで見学会を行いました。初めに、多磨全生園に隣接している国立ハンセン病資料館を訪れました。そこには、ハンセン病患者に対する差別と偏見の歴史が、詳細に展示されていました。ハンセン病は、遺伝病であり、強い伝染力があり、そして不治の病だ。そうずっと誤解され続けてきたゆえに、壮絶な人権抑圧が、国家を挙げて押し進められてきた事実を知らされました。1907年に施行されたらい予防法は、ハンセン病患者の救済のためとは呼ばれながらも、実際は、日本民族の浄化政策の一環と見なされていたのです。1943年に、プロミンというハンセン病治療に画期的な薬が開発され、ハンセン病は、決して不治の病ではなく、適切な環境であれば、極めて伝染力が弱いことが証明されました。しかし偏見意識がそのまま踏襲された形で、1953年にらい予防法が改定され、差別を禁止するという文言を入れながらも、強制隔離政策はずっと維持された状態だったのです。一方、世界レベルでは、1956年に、ローマにてハンセン病患者の救済のための会議が開かれました。その会議では、世界における全ての差別的な法律の撤廃、在宅医療の推進、早期治療の必要性、社会復帰援助等をうたったローマ宣言が採択されました。そして実は日本もまた、このローマ会議に参加していたのです。それにもかかわらず、日本は結局らい予防法を廃止することなく、1996年まで、維持され続けていたのです。

その後、多磨全生園でずっと自治会長をしていたお二人のご夫妻から、全生園の中にある喫茶店でお話を伺うことができました。名前を森元美代治さんと美恵子さんとおっしゃいます。ご主人の美代治さんは、カトリックのクリスチャンで、美恵子さんは、プロテスタントのクリスチャンです。お二人は、本名を隠すことなく、挨拶をしてくださいました。当たり前のことだと思うかもしれませんが、ハンセン病患者の人たちは、その殆どが、自分の本名を明らかにすることなく、別名を使って生きてきました。

なぜでしょうか。先ほど言った通り、ハンセン病患者は、様々な差別と偏見にさらされ続けてきましたが、中でも一番厳しい差別は、ほかならぬ家族による差別です。家族に、親戚に、ハンセン病患者がいることが世間に知られると、悪いうわさが付きまわってしまう。就職や仕事、地域の付き合いから学校の付き合い、あらゆることに至って、ハンセン病患者がいるというだけで、敬遠され、声がかからなくなり、人が離れていく。だから、家族の中でも、ハンセン病患者の人権を守るのではなく、存在を知られな

いように、患者に別名を使ってもらうように頼んだのだというのです。そして、そのような厳しい現実の中で、ハンセン病患者の人たちは、家族のためを思って、その不条理な意見を受け入れ続けていたというのです。

森本さんご夫妻もまた、同じ差別を受けていました。特に、一番上のお兄さんが鹿児島県のある市長という公職に就いていた関係で、家族による森元さんへの対応はひと際厳しいものがありました。お母さんが亡くなった時も、上のお姉さんが、葬儀の日程を知らせてくれたのですが、葬儀に行っていないかお兄さんに聞いてみたところ、やはり、来ないでほしい、と告げられたのです。葬儀の夜、美代治さんは美恵子さんと一緒に、多磨全生園の部屋で、お母さんの写真の前で激しく泣いたそうです。

なぜ、自分たちが、このような厳しい差別を受けなければならないのか。伝染力が弱く、遺伝病でもなく、適切な治療で完治する病気だ。それなのに自分たちだけ、隔離され、人権が抑圧されているのはなぜなのか。森元さんは、この差別の根因に、「らい予防法」という悪法があるからだと考えました。そして、このらい予防法の廃止のための運動を始めたのです。やがて自分のハンセン病患者としての経験を語り、次第に多くの賛同と支持を得るようになっていった。

その運動の際のこと、森元さんが奈良県での講演で呼ばれた際に、支援者のある党の方々から、もし本名で語ったら、もっとその話は人に伝わるはずだ、と勧められました。そこで、森元さんご夫妻は苦渋の決断をいたします。家族に迷惑が及ぶかもしれないことを恐れつつも、多くの数知れず、本当の名前も告げることができずにいるハンセン病患者の声を代弁するようにして、本名で、この運動を行ったのです。

このようにして、森元さんご夫妻は、悲惨な差別の過去を明かすこともなく、自分の本名も死の最後まで告げることもできずに亡くなっていった数知れない多くのハンセン病患者の人たちを代弁して、自分の経験を語り始めていきました。

私は思います。森元さんご夫妻が語り始めた出来事の背後には、キリスト者であることが非常に大きな支えになっていったのではないのでしょうか。また、ハンセン病の差別の出来事を語り始める勇気もまた、神の導きによって与えられたものなのではないのでしょうか。壮絶な人権抑圧の過去を抱え、黙っていた方が家族のため、自分たちのためだといわれる中、神の義を求めようとして、語り始めたその勇気は、キリストの救いの信仰によるものだったのではないのでしょうか。

なぜ、私がそう思ったのかというと、森元さんのある言葉を聞いたからです。森元さんご夫妻の話を聞きながら、気づいたことがあります。声のトーンが明るいのです。人生に絶望している声や、諦めに満ちた声ではありませんでした。美代治さんは、最後にこのように話してくださいました。「私は、神さまを信じて本当によかった。神さまは必ず、私たちを救ってくださる方だ。そういう信頼があったからこそ、俺は生きていけた。いや、生かされてきたんだ。」

皺のよった顔を精いっぱい動かして、はつらつと語ってくださいました。けれども、その裏には、筆舌に尽くしがたい苦難を味わったのです。それでも、希望を思い起こさせるあの声はどこからきたのでしょうか。それは、神の業が、この方々を生かしていたからです。もはや、人間の業ではない神の業が、この方に現れているのです。誤解を恐れずに言えば、ハンセン病という差別と偏見に満ち満ちた病を得てもなお、この方の人生は祝福されているのではないのでしょうか。それは、キリストがおられるからです。

人間の差別や偏見という、愚かしい行為になお屈することのない、キリストの愛の力の働きが、この方々のうちに確かにあるのです。

新約聖書にパウロという伝道者が登場します。かつて厳格なユダヤ教徒でした。その熱心ぶりは、キリスト者を迫害し、牢獄に入れ、殺害を指示するまでに至る、非常に過激なものでした。しかし、キリストの幻に出会って、目が見えなくなりましたが、やがて、目が見えるようになって、その出来事をきっかけにキリスト者になったのです。やがてパウロは、キリストの福音を伝える伝道の旅に出かけます。その旅の途上で、うまくいくこともありましたが、全く人々が聞き入れてくれない、失敗の多い旅の時もありました。今日読んだ聖書箇所の前には、ちょうど失敗の連続だった中で、ようやく久しぶりに、自分の伝道によってキリスト者となるものが現れた時でした。そこで神は、言われます。「恐れず、語り続けなさい。…」

私は、苦境の中にあつた時にこそ、神が語られた声によって勇気を得て、また力強く神の福音を証ししていったパウロと、森元さんご夫妻の姿が重なって見えます。恐れずに、語り続ける。その原動力は、彼らにとって、自分自身のうちにあるのではないのです。神によって生かされている恵みゆえに、その恵みに応じる形で語り出していったのです。

皆さんの中にも、なかなか自分のことを語り出すことができず、それが自分のコンプレックス、弱みと思っている人もいるかもしれません。あるいは、不当なことや不正義に対して、正義の声を挙げるのがなかなかできない人もいるかもしれません。けれども、森元さんも、また、パウロも、私たち人間誰しもが、自分の声を挙げることのできる可能性を持っていることを教えてくれています。それは何によってでしょうか。それは、パウロも、また、おそらく森元さんも、自分の力によってではないのです。自分の以外の力、それは、究極的に言って神の導きによるのです。

聖学院大学は、その変わるきっかけとなるためのイベントを皆さんに多く提供しようとしています。ボランティアは、そのもっとも最善のイベントでしょう。ぜひ、変わる自分を思い描いてほしいのです。そして、自分なりに、殻を破ろうとする一歩を踏み出してみてもはどうでしょうか。その一歩を、神は、しっかりと、この聖学院大学という器を通して、さらに導いてくださるはずだからです。そして、この一歩を踏み出す勇氣、そして、その一歩を踏み出す勇氣を具体化することを、聖学院大学は、30年間、愚直に、真摯に、為し続けていったのではないのでしょうか。そしてこれからも、このことを大事に行い続けていくことが、「神を仰ぎ、人に仕う」ことをスクール・モットーとし、「一人を愛し、一人を育む」ことを教育方針とするこの大学の使命であるのです。

2018年10月17日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「創立30周年を覚えて」